

インドネシア語における「語種」

—日本語学の視点から—

青柳 沙 恵

1. はじめに

近年、日本語と中国語や韓国語などの日本と親交が深い国の言語との対照研究は順調に進んでいる。その一方で、インドネシア語のように、親日国で日本語教育が盛んに行われ、日本語教育学としての研究も進んでいるにも拘わらず、日本語学としての対照研究はあまり進んでいない分野がある。そこで、実際に日本語教育学の立場で関わったインドネシア語について、語彙の側面から日本語学的な対照研究の可能性を探るため、インドネシア語の基礎語彙とその「語種」について調査する。もとより日本語の歴史とインドネシア語の歴史は大きく異なり、日本語の語種という観点をインドネシア語にそのまま適用できるものでは無いと考えられる。その一方で、日本語との対照研究が進む東アジア諸語については、語種という観点から比較したものも少なくないため、その有効性の有無を探るための試論としたい。

なお、日本語学の視点からインドネシア語の基礎語彙や語の出自（以下、「語種」と表記する）の性格について調査した先行研究は、管見の限りでは見られない。また、日本・インドネシア両国において、インドネシア語の語源について詳しく調査した先行研究も見られなかった。

本稿では、日本語学の視点からインドネシア語の「語種」についての調査を行い、日本人がインドネシア語を学ぶ際に使用するインドネシア語教育学の中で定められた基礎語彙を対象とする。具体的には、東京外国語大学が公開する「インドネシア語語彙モジュール」に収録されている語彙を使用し、国立国語研究所が定める『分類語彙表』に従って分類する。日本語学において定義され研究が進んでいる語種の観点から、「インドネシア語語彙モジュール」の「語種」を分類し、インドネシア語教育学の中で定められた基礎語彙の特徴をさらに明らかにし、インドネシア語学における基礎語彙の選定や「語種」研究における可能性を探る。

2. 日本語学から見たインドネシア語

まず、日本語学の観点から見たインドネシア語について確認しておく。『日本語大事典』(2014)では、崎山理氏によって以下のようにまとめられている。

オーストロネシア語族西部マライ・ポリネシア語派マライック語群に属する一言語。言語学的にはマレー語と呼ばれるが、一九四五年、インドネシアの独立後、マレー語がインドネシア共和国憲法において国語と規定され、公的にインドネシア語 (Bahasa Indonesia) と呼ばれる。マレーシア連邦、シンガポール、ブルネイではマレー語が国語としてマレーシア語 (マレー語) と呼ばれ、マレー語の使用

人口は一億数千万人に達する。ただし、マレー語を母語とする人口は、それををはるかに下回る。インドネシア語という名称は、まだオランダの統治下にあった一九二八年、全国青年インドネシア会議における「青年の誓い」、そして一九四二（昭和一七）年に始まる日本軍政時代ですでに使用されていた。

また、インドネシア語の歴史や日本への伝来については以下のように述べられている。

マレー語は、歴史的にはマレー半島西部沿岸の漂海民族の言語（現在のマライック語群モクレン諸語）であったが、島々の間で交易語として使用が広まり、西暦七世紀の最古の碑文からも多言語国インドネシアの共通語としての地位を確立していたことがうかがえる。インドネシアのジャワ島の土着語であるジャワ語は、話者数からもその歴史的文化的奥深さからも、公用語となる資格は十分満たしていたが、インドネシアにおける独立に際し大きな言語問題が発生しなかったのは、マレー語の共通語としての長い歴史が勝ったからである。

文字は宗教の伝来と関係があり、初期の碑文は南インド系バラッヴァ文字、また十四世紀からはアラビア文字による碑文が登場する。アラビア文字の使用は十七世紀に始まるオランダ時代まで続き、以後、ローマ字による表記が始まる。また、マレー語に取り込まれた借用語は、サンスクリット語、アラビア語が最も多く、オランダ語がそれに次ぐ。日本時代に借用された *jibaku* ジバク「自爆」、*samurai* サムライ（侍）から意味変化した「刀」などのような語彙は現在も日常的に用いられている。

……日本に紹介された南方の言語としてマレー語は最も早く、森島中良『紅毛雑話』（一七八七（天明丁未）年）で記録されている。当時、長崎に入港したオランダ船の船員から得た情報である。その言語「マライス」はオランダ語の呼び名、また梵字に似た文字があるというのがアラビア文字の勘違いである。

以上のことから分かるように、インドネシア語は、インドネシアのそれぞれの地域で話されている地方語とともにインドネシア国内で広く流通しており、インドネシア人にとって最も有効なコミュニケーションの手段となっている。また、学校教育の中でも使用されているいわば国語であり、インドネシアだけでなくマレーシア連邦やシンガポールなどの他の国々でも広く使用されている、大きな役割を担った言語であると言える。

インドネシア語も、歴史的な経緯からマレー語や中国語、オランダ語やアラビア語由来の語彙が段階的に拡大していると考えられるが、その詳細は示されていない。

3. 基礎語彙について

本論文では、日本語学の視点をを用いた研究の可能性を探るため、基礎語彙を通じた日本語とインドネシア語の対照を行う。まず、基礎語彙について確認しておく。『日本語大事典』では、玉森禎郎氏が「基礎語彙」について以下のようにまとめている。

いずれの言語においても語彙の中核をなすきわめて基本的な語彙をいう。したがって、日常生活に関係の深い語彙でもある。この術語の用法には、言語教育におけるものと言語年代学におけるものがある。

以上のことから、基礎語彙は日常生活に関係の深い基本的な語彙であり、言語教育と言語年代学の2つの考え方があり、言語教育のための基礎語彙については以下のようである。

最低限これだけあれば日常生活ができるとされる語の集合をいう。基本語彙のほうはどのような目的でどの範囲において考えるのかによって変わるものなので、「〇〇基本語彙」というように限定されることが多いのに対し、この基礎語彙は日常生活に関係が深いことが前提となっているために、「日本語の基礎語彙」という言い方で用いられることが多い。基本語彙が計量的な語彙調査に基づいて客観的帰納法に得られるものであるのに対し、この基礎語彙は言語教育の専門家が経験や理論に基づいて主観的演繹的に選ぶため、選定基準や語数の妥当性などについて疑問が出されることがある。また、必要最小限の語彙に制限するため、言語表現が十分行えない、不自然な表現になるなどと批判されることもある。したがって実用的には制限をゆるめて用いられることが多いが、そもそも少ない語の組み合わせで多くを表現しようとするのであるから、無理な面を伴うのも当然のことといえる。これまでに選定された基礎語彙に修正すべき点があるとしても、基礎語彙という考え方そのものが否定されるものではなからう。

言語年代学における基礎語彙については以下のようにまとめられている。

スワデシュ (M.Swadesh, 1909~67年) の唱えた言語年代学において、言語の年代等の測定に基礎語彙が用いられる。基礎語彙はその言語の語彙の総体のうち中核をなす日常生活にも不可欠な語彙であるため、そこに属する語には他言語にも意味の上で対応する語があるが、そのような語は変化しにくく、変化する場合の速度には規則性があると考えられるので、同じ語族に属する言語の基礎語彙において共通語彙の残存率を計算し、その数値によって言語間の距離と言語の枝分かれ時期が推定できるとした。

本稿では、インドネシア語とインドネシア語教育学における日本語について取り扱うため、先に紹介した言語教育のための基礎語彙の考え方を参考にする。日本とインドネシアは、言語だけでなく生活様式や宗教観も大きく異なるため、それぞれに属している語彙を単純に比較していくことは直感的にも難しいことが分かる。そこで、国や時代を超えて通用すると考えられてきた基礎語彙に絞って本考察を進めるのである。

4. 調査方法

日本語学において広く用いられる国立国語研究所の『分類語彙表 増補改訂版』(2004) (以下『分類語彙表』とする) に基づき、日本人がインドネシア語を学ぶ際に使用するインドネシア語教育学の中で定められた基礎語彙の収録語彙を分類する。この分類は、異言語における基礎語彙の在り方を客観的に対照させることを見据えたものである。

インドネシア語教育学の基礎語彙として、東京外国語大学の「インドネシア語語彙モジュール」に収録されている語彙を使用し、国立国語研究所が定める『分類語彙表』の分類に従って分類する。同じように、土居光知が1933年に著した『基礎日本語』内で紹介されている「基礎日本語分類表」(以下「基礎日本語」とする)と東京外国語大学の「日本語語彙モジュール」についても分類分けし、それぞれの特徴を明らかにする。また、インドネシア語教育学の中で定められた基礎語彙には、インドネシア語辞書に記載されている語源も載せ、日本語学の中で確立されてきた語種研究の手法を用いて考察することで、インドネシア語教育学の中で定められた基礎語彙に見られる「語種」の特徴も明らかにする。

4. 1 土居光知による「基礎日本語分類表」

土居光知の「基礎日本語分類表」は、千語の基礎語彙を選定したものである。土居光知の『基礎日本語』によると、「この基礎日本語は出来る限り単純な、しかし何事でもはつきりと言ひ表し得る、整理された、また、記憶することがたやすい、基礎となるべき日本語を組織することを目的とした試み」であり、「僅か千語を以つて普通のことは何でもいひ表すことのできるやうにし」たと述べられている。基礎日本語の目的について、以下の5つが挙げられている。

- 一、この基礎日本語はわづかに千語である故に小學校の初めの五六年間に完全に読み書きができるやうになると思ひます。……
- 二、朝鮮や台湾の人々に日本語を教へることが非常にむづかしいといはれて居ります。これから満州でも日本語を教へることが必要になりませう。……整理され、記憶することがたやすくされた基礎日本語を以つてしたならば、成功することができて、日本の人々とその場所に生れた人々とが直接に話もできるやうになり、心と心との親しい了解もできるかと思ひます。
- 三、……基礎日本語はこれ等のむづかしさをなくして、日本語を他の國の人々もたやすく話し、また書くやうにすることが目的であります。
- 四、……ローマ字を使用するためにも、同じ音で異なる意味の語、聞き慣れぬ、目で見なければ了解することのできぬ語は避けねばなりません。基礎日本語はこの選擇を充分にしてある故ローマ字で表してもたやすく了解されませう。
- 五、基礎日本語は幼い人等が文章を作る時に一つのよい教育を與へ得ると思ひます。……基礎日本語は、同じ内容を言ひ表す文章のうちで、より単純な、たやすい方が、よい誠のものであること、人々のためになることはできる限り

多くの人に読まれる、たやすい文章で書くべきであるとの考を與へます。

以上のことから、「基礎日本語」は、日本における日常生活が一通りまかなえる最小限の語を千語だけ系統的に選び出したものであり、初歩的な段階の外国語学習者や旅行者向けに実用的な目的で選ばれるものであるが、それなりに一つの体系をもっている点に意味があるとされている。これは、「イギリスの國ケムブリヂの Orthological Institute の C.K.Ogden 様の考案した Basic English から間接の教へを受け、昭和七年一月に語表を作り初め、昭和八年一月に文章の規則その他を書き終ることができました。」と記されているように、イギリスのオグデン (C.K.Ogden) らが組み立てた国際補助語としての Basic English 五百語 (1929 年発表) にヒントを得たものである。この基礎語彙とは、多少の無理が生じてもその範囲の単語だけで何とか用を足していけることを狙ったもので、言語的な一種の極限状態を想定しているものであるため、普通の基本語彙とはその目的や性格がかなり異なっている。「基礎日本語」との比較対象として東京外国語大学の言語モジュールの「インドネシア語語彙モジュール」を選んだのはそのためである。

では、「基礎日本語」と現代のインドネシア語や日本語を比較することに意味はあるのだろうか。土居光知 (1933) では「基礎日本語」語彙の十分の八以上が「名を表す語」(名詞) であり、できる限り「働きの語」(動詞) を使用しないようにしたと述べている。また、名詞や形容詞などに「する」を添えて動詞を作ることができるとしたことや、「働き」の語から「働きの観念」を表す語を求め、動詞の連用形を名詞として取り扱いながら、動詞としても使用できるようにしたことなども名詞の多さに大きく関係していると考えられる。森田良行氏は、『基礎日本語一意味と使い方』(1977) の中で、日本語教育の立場から、次のように学習初期段階における動詞・形容詞類の習得の重要性を説いている。

初級レベル、中級レベルでの学習必要語彙という面から調査したら、名詞の比率は減少し、動詞や形容詞グループが増加するであろう。初級・中級段階という基礎を身につける時期に、基本的な動詞や形容詞はあらかじめ学習してしまい、上級段階以降にひきつづき獲得していく語彙はほとんどが名詞で、あとは成句・慣用句の類である。

以上のことから、日本語教育の立場から見た場合、名詞が主として収録されている「基礎日本語」は「初級」の段階だけに焦点をあてている語彙ではないということになる。さらに響場淳子氏は、国立国語研究所による『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』(1994) の中で、「簡約日本語語彙表」の研究目的について述べ、「簡約日本語語彙表」と比較することによって「基礎日本語」の特徴を明らかにしている。その中で、「国際共通語としての日本語を世界により広く進めるためには日本語のむずかしい点を取り払いエッセンスとしての日本語を創り出す必要がある。これを「簡約日本語」を創成し、その教材化を図ることを目的とする。」と述べられているように、日本人にとっての「基礎語彙」というよりも日本語を学ぶ日本語非ネイティブ向けに

考えられた「基礎語彙」であるということになるであろう。響場氏は『意味分野の観点から見た土居光知「基礎日本語」』(2008)の中で、「簡約日本語語彙」との比較から「基礎日本語」の特徴について述べている。「基礎日本語」は他の語彙と比べて「体の類」(名詞・代名詞)に多くの語を配置しており、その分、「用の類」(動詞)は少なくなっている。また、教育用語彙として見ると、学習の初期段階において習得する語彙というより、第二段階の語彙を多く含んでいる。

以上のことから「基礎日本語」に収録されている語彙は、初学者向けの基礎語彙ではなく、日本で生活する上で必要となる語彙を集めていると考えられる。このことから、「基礎日本語」を一つの指標としつつ、同程度の基準で構築されたと考える東京外国語大学言語モジュールを併せて分析したい。

4. 2 東京外国語大学「インドネシア語語彙モジュール」

東京外国語大学の言語モジュールの「インドネシア語語彙モジュール」は、対象者と目的、基本的な語彙の定義として以下のように示している。
(<http://www.coelang.tufs.ac.jp//mt/>)

語彙モジュールは、初級の学習者を対象とし、基本的な語彙の整理と理解を目的にしています。

日本語能力試験4級の基礎語彙をもとに各言語に特徴的な語彙が加えられています。おおよそ700語から900語を収録してあります。語彙の意味分類には国立国語研究所の『分類語彙表』を参考にしています。

この点で、初学者を対象として生活する上で必要となる最低限の語を収録していると考えられる。語彙モジュール内の「分類語彙表検索」では、国立国語研究所の『分類語彙表』の分類方法を踏襲している。『分類語彙表』に「基礎日本語」の語を当てはめ、現在使用されている「インドネシア語語彙モジュール」と比較することによって、「インドネシア語語彙モジュール」の特徴を明らかにする。

4. 3 国立国語研究所の『分類語彙表』を使用する意義

『分類語彙表』の概要については、柏野和佳子氏の「研究所報告『分類語彙表』の特徴と位置付け」(2006)に詳しい。柏野氏は『分類語彙表』について以下のようにまとめている。

『分類語彙表』とは1964年に国立国語研究所資料集第6として公刊された、現代日本語を対象とした最初のシソーラスである。1999年までに31版を重ねる一方、1981年より増補改訂作業がはじまった。1996年3月のモニター用公開(中野 1996a、1996b)を経て、2004年1月には現在の『分類語彙表』の増補改訂版が刊行され、同時にデータベースも公開された(山崎 2004)。

『分類語彙表』とは何かについては、初版の「まえがき」には次のように述べられ

ている。

ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。

そして、分類語彙表の役割として以下の二つを挙げている。

- ①言葉や概念を手がかりに、適切な言葉を見つけるもの
- ②語彙の分布や偏りを見るための「物差し」となるもの

柏野氏は『分類語彙表』の特徴を以下のようにまとめている。

その結果、『分類語彙表』は、表現辞典として、また、言語の研究資料として数多く利用されてきている。(宮島・小沼 1994 ; 中野 1995)。例えば、宮島・小沼 (1994) には『分類語彙表』を言語研究に利用した論文 136 例 (1965 年～1994 年) が取り上げられている。電子化された FD 版 (国立国語研究所編 1994) が市販された後は、工学的な言語処理研究における利用も一気に広がった。近年は医学や建築学での利用もあり、『分類語彙表』の研究利用のすそのはさらに広がっている。

以上のことから『分類語彙表』は言語研究のみならず、工学的な言語処理研究や医学、建築学など他の様々な分野の研究にも使用されており、表現辞典としての役割も果たしていると言える。また、『分類語彙表』の 2 つ目の役割として「語彙の分布や偏りを見るための「物差し」となるもの」が挙げられていることから、基礎語彙を調査する上で、分布や偏り、特徴を捉えることのできる「物差し」として適していると言える。

5. 調査結果

「基礎日本語」、「インドネシア語語彙モジュール」、「日本語語彙モジュール」のそれぞれの収録語を『分類語彙表』に当てはめ、共通する語・しない語について意味の観点から考察することによって、それぞれの語彙の性格を明らかにする。以下、各項では冒頭に調査結果の表を掲げていく。

表 1

	インドネシア語と基礎共通	インドネシア語と日本語共通	インドネシア語のみ	基礎日本語のみ	日本語のみ
1 体の類計	137	303	35	588	143

1.1 抽象的関係	29	70	14	143	80
1.2 主体	22	55	9	33	23
1.3 精神行為	17	48	2	198	15
1.4 生産物	43	100	6	87	20
1.5 自然物	26	30	4	127	5
2用の類	11	62	7	30	52
3相の類	34	74	8	74	39
4その他	2	6	1	13	10
分類なし	0	0	0	15	0
合計	184	444	52	719	244

「インドネシア語語彙モジュール」と「基礎日本語」に共通しているのは 184 語、「インドネシア語語彙モジュール」と「日本語語彙モジュール」に共通しているのは 444 語であり、同じ東京外国語大学の言語モジュールである「日本語語彙モジュール」の方が共通する語が多く、分野別に見ても同じである。また、饗場氏も指摘しているように、「1.3」、「1.4」、「1.5」は「インドネシア語語彙モジュール」と共通している語数より「基礎日本語」だけに見られる語の方が多い。「基礎日本語」と共通している語数より「インドネシア語語彙モジュール」にのみ見られる語数が多いものはないが、比率から見れば「2用の類」の比率が高い。一方で「2用の類」では「基礎日本語」だけに見られる語数よりも「日本語語彙モジュール」のみに見られる語数のほうが多い。

5. 1 「インドネシア語語彙モジュール」に見られる「語種」

ここからは、「インドネシア語語彙モジュール」に見られる語彙のそれぞれの「語種」の数と比率について見ていく。インドネシア語には語種概念がなく「語源」として書かれているが、本研究では日本語学の中で確立された語種研究にあてはめるため、インドネシア語の語源は「語種」として表している。無印は、マレー語由来の語を示している。

表2 「インドネシア語語彙モジュール」に見られる「語種」の語数と比率

	語数	比率
アラビア語	34	5.0
アラビア語又はオランダ語	2	0.3
中国語	8	1.2
オランダ語	71	10.5
オランダ語又は英語	10	1.5
英語	7	1.0
ヒンディー語	3	0.4
ジャカルタ語	1	0.2

ジャカルタ語又はジャワ語	5	0.7
ジャワ語	13	1.9
ペルシャ語	6	0.9
ペルシャ語又はオランダ語	2	0.3
ポルトガル語	21	3.0
ポルトガル語又は中国語	1	0.2
サンスクリット語	57	8.1
サンスクリット語ネオ	2	0.3
サンスクリット語又はヒンディー語	1	0.2
タミル語	4	0.6
無印	430	63.7
計	678	100

以上のことから、無印のものを除くと、全体ではオランダ語由来のものが最も多く見られた。それぞれの類毎に見ると、「体の類」で最も多く見られたのはオランダ語由来の語、「用の体」ではサンスクリット語由来の語、「相の体」ではジャワ語とサンスクリット語由来の語、「その他」ではサンスクリット語由来の語である。このように、品詞によって多く見られる語源は異なっていることがわかる。また、無印のもの比率は、「体の類」では 53.78%、「その他」では 44.6%なのに対し、「用の類」では 87.4%、「相の類」では 90.3%と非常に高くなっている。

以下、それぞれの「語種」に見られる特徴を明らかにする。

5. 2 オランダ語由来の語

表3 オランダ語由来の語 意味分野別分布

分類項目	語数
1.19 量	12
1.24 成員	3
1.26 社会	9
1.27 機関	3
1.31 言語	4
1.32 芸術	3
1.40 物品	3
1.42 衣料	5
1.43 食料	1
1.44 住居	6
1.45 道具	8
1.46 機械	11

1.50 自然	1
1.54 植物	1
4.30 感動	1

オランダ語由来の語は、無印を除いた他の「語種」に比べて最も多く見られる。括弧 () 内の数字は出現回数を示している。

Mei (五月)、Januari (一月)、September (九月)、Maret (三月)、April (四月)、Juli (七月)、November (十一月)、Oktober (十月)、Desember (十二月)、Februari (二月)、Agustus (八月)、Juni (六月)、dokter (医者)、polisi (お巡りさん、警官) (3)、stasiun (駅)、kantor (会社) (2)、kelas (クラス) (2)、bank (銀行)、pos (郵便) (3)、universitas (大学)、hotel (ホテル)、restoran (レストラン)、koran (新聞)、telepon (電話)、buku (本) (3)、film (映画、フィルム) (2)、musik (音楽)、foto (写真)、perangko (切手)、karcis (切符)、paket (荷物)、jas (コート)、rok (スカート)、selop (スリッパ)、dasi (ネクタイ)、saku (ポケット)、permen (あめ)、kamar (部屋) (4)、rak (棚)、tas (かばん)、gelas (コップ)、asbak (灰皿)、amplop (封筒)、pulpen (ペン、万年筆) (2)、bis (バス) (2)、kamera (カメラ)、sepeda (自転車)、mobil (自動車)、taksi (タクシー)、televisi (テレビ)、bus (バス)、radio (ラジオ)、kulkas (冷蔵庫)、es (氷)、cokelat (茶色)、sitrun (レモン)、permisi (あの)

オランダ語由来の語は「permisi (あの)」以外全て「体の類」に含まれる語である。「1.19」(量など)、「1.26」(社会など)、「1.45」(道具など)、「1.46」(機械など)に多くの語が見られる。トルセノ氏は「インドネシア語発展に寄与したジャワ語の社会的背景の一考察」(1976)の中で、「インドネシアは数世紀にわたりオランダ植民地としての運命をたどったが、オランダ支配下にあつては、オランダ人との接触をみた者は、とりわけ、一部の上層階級のみであった。したがって、オランダ語と一般大衆層とは無関係な立場にあり、かれらには、それぞれの地方語があるにすぎなかった。」と述べているように、オランダ植民地時代にはインドネシアの庶民層とオランダ語との接触はなく、庶民層はみなそれぞれの地方語を使用していたのである。しかし、その後のオランダ語のインドネシア語への流入について、以下のように述べている。(「インドネシア語発展に寄与したジャワ語の社会的背景の一考察」(1976))

3) インドネシアの大学へ一つの焦点を合わせてみると、実際のところ、専門分野における学術研究を行う場合、学生は外国から輸入される外国語による教科書ならびに参考書、その他の類の文献を使用する。したがって、直接、原語で学習するのが実情である。

特に中でも、現代学術部門においては、各国より輸入されてくる書物を以って研究が行われる。この理由の一つには、インドネシア語の書物および教科書、文献書類の不足が第一に指摘できる。

その他、インドネシアでは、一般に、人類文化学、法律学、などの学習に当っては、それらの参考文献はオランダ語の著書を用いるのが一般的である。

このようなオランダ語への寄生傾向は独立後すでに 30 年余りの歳月を経た今

日、未だ根強く、従って言語の独立、自立は、まだまだ未到来といえる。……特に学術部門においては、オランダの遺産に依存する術しかなく、オランダ語を除いては、なにゆえも習得できない、という現実を認めざるを得ないのである。

以上のことから、学術部門におけるオランダ語の影響は今日まで根強く残っていることが指摘されている。

あらためてオランダ語由来の語を見てみると、「**dokter** (医者)、**polisi** (お巡りさん、警官)、**universitas** (大学)、**buku** (本)、**film** (映画、フィルム)、**musik** (音楽)、**foto** (写真)」など、学術や専門分野に関する語が多く見られている。一方で、「**Mei** (五月)、**Januari** (一月)、**September** (九月)、**Maret** (三月)、**April** (四月)、**Juli** (七月)、**November** (十一月)、**Oktober** (十月)、**Desember** (十二月)、**Februari** (二月)、**Agustus** (八月)、**Juni** (六月)」のような月の名前や、「**stasiun** (駅)、**kantor** (会社)、**kelas** (クラス)、**bank** (銀行)、**pos** (郵便)」などの機関や組織、「**perangko** (切手)、**karcis** (切符)、**paket** (荷物)、**rak** (棚)、**tas** (かばん)、**gelas** (コップ)、**asbak** (灰皿)、**amplop** (封筒)、**pulpen** (ペン、万年筆)」などの日用品、「**jas** (コート)、**rok** (スカート)、**selop** (スリッパ)、**dasi** (ネクタイ)、**saku** (ポケット)」などの新しい服装や、「**bis** (バス)、**kamera** (カメラ)、**sepeda** (自転車)、**mobil** (自動車)、**taksi** (タクシー)、**televisi** (テレビ)、**bus** (バス)、**radio** (ラジオ)、**kulkas** (冷蔵庫)」などの機械に至るまで幅広くオランダ語由来の語が見られている。これらの語は新しい概念としてオランダ語からインドネシア語にそのまま取り入れられたと考えられるが、現在も使用されていることから、オランダ語は庶民層にもある程度の広がりを見せていたと考えられる。

5. 3 サンスクリット語由来の語

表4 サンスクリット語由来の語 意味分野別分布

分類項目	語数
1.16 時間	1
1.17 空間	1
1.19 量	1
1.20 人間	6
1.21 家族	7
1.24 成員	1
1.25 公私	4
1.26 社会	1
1.27 機関	1
1.30 心	3
1.31 言語	8
1.33 生活	1
1.38 事業	1
1.43 食料	1

1.45 道具	1
1.46 機械	1
1.50 自然	1
1.51 物質	2
1.56 身体	2
2.31 言語	6
2.34 行為	1
2.38 事業	1
3.16 時間	1
3.30 心	2
4.31 判断	1
4.32 呼び掛け	1

サンスクリット語由来のものは次の語である。

ketika (時)、utara (北)、semua (皆さん、みんな)、pria (男)、dewasa (大人)、wanita (女)、saja (だけ)、manusia (人)、saya (わたし、私)、saudara (兄弟) (2)、suami (夫)、keluarga (家族)、istri (妻)、suami istri (夫婦)、guru (先生)、negeri (国) (3)、negara (国)、serba (すべて)、kedutaan (大使館)、arti (意味)、suara (声)、pekerjaan (仕事) (2)、bahasa (言語) (4)、kata (語、言葉) (2)、peta (地図)、cerita (話)、cuci (洗濯)、gula (砂糖)、kenci (鍵)、kacamata (めがね)、warna (色)、cuaca (天気) (2)、kepala (頭)、muka (顔)、berkata (言う)、mengatakan (言う)、bercerita (語る)、bernama (名のる)、berbicara (話す)、membaca (読む)、bekerja (働く)、mencuci (洗濯する)、segera (すぐ)、suka (好き) (2)、silakan (どうぞ)、sama-sama (どういたしまして)

サンスクリット語由来の語は、オランダ語由来の語と比べても幅広い意味分野から見られている。中でも「1.20」(人間など)、「1.21」(家族など)、「1.31」(言語など)、「2.31」(言語など)に比較的多くの語が見られる。

関伊統氏が「インドネシア語の系譜」(1970)の中で「……ヌサンタラとは、インドの古書にインドネシアのこととして見られる」と指摘しているように、インドネシアとインドとは古くから関わりがあったことがわかる。しかし、「……いつ頃からヒンズーの影響、すなわちサンスクリット語が、ヌサンタラに入って来た」のか「残念ながら、現在のところそれはまだ明らかにされていない。多分、その影響は紀元からはるか以前に、遡り得るであろう。」とし、以下のように述べている。

……航海と通商の結果、その影響は現われた。前述の如く、インドからも人々はやってきたであろうし、逆にヌサンタラの住人達も海洋性、航海性の民族なるが故に、盛んに出向いていった。そして、インドの文化を持ち帰ったのである。インドの一学者によると、マライ人が1世紀にマダガスカルを征服したという。1世紀の頃、東南アジアには、いくつかの王国が興っているが、いずれも、ヒンズー文化の影響を受けている。それらの諸国では、宗教用語はサンスクリット語

であった。日本の歴史研究家も、紀元 150 年頃には、インドとヌサンタラ間の交流はあったとしている。

さらに、サンスクリット語の影響について、以下のようにまとめている。

サンスクリット語の影響も、ヌサンタラの遺族や僧侶階級によって主に取り入れられ、用いられた。しかしながら、ヌサンタラの住民の間に幾世紀に渡って続いたこのサンスクリット語は、マライ語に大きな影響を与えはしたが、完全に取って替わるところまではいかなかった。それはヌサンタラの住民の日常用語はマライ語であって、もっぱらサンスクリット語は宗教用語として、また学術、文学、文芸用語として用いられたからである。それ故、マライ語は尚存続したのであり、それが発展しやがて完全にサンスクリット語を吸収し、同化させてしまったわけである。

また、関氏は「インドネシア語の系譜 (II)」(1970) の中で、「パガル・ルヨンの碑文 (1356 年、スマトラ・ミナンカバウのパガル・ルヨン (著者注)) は、インドの文字で、語彙もまだマライ語にサンスクリット語が混入している状態である」と述べているように、サンスクリット語がマレー語に与えた影響は非常に大きく、宗教用語だけでなく学術、文学、文芸用語としても使用されてきたことがわかる。

ここでサンスクリット語由来の語を見ると、「arti (意味)、bahasa (言語)、kata (語、言葉)、peta (地図)、cerita (話)、berkata (言う)、mengatakan (言う)、bercerita (語る)、bernama (名のる)、berbicara (話す)、membaca (読む) のような学術、文芸に関する語が多く見られる。さらに「semua (皆さん、みんな)、pria (男)、dewasa (大人)、wanita (女)、saja (だけ)、manusia (人)、saya (わたし、私)、saudara (兄弟)、suami (夫)、keluarga (家族)、istri (妻)、suami istri (夫婦)、guru (先生)」のような人に関する語や、他の言語由来の語と比べて「用の類」が多く見られることも特徴として挙げられる。これは、関氏の指摘の通り、古くからインドネシア語の元となったマレー語にサンスクリット語が流入したことにより、サンスクリット語の一部が日常的に使用される言語として定着したことの一つの例と言えるのではないだろうか。

5. 4 アラビア語由来の語

表 5 アラビア語由来の語 意味分野別分布

分類項目	語数
1.16 時間	10
1.19 量	3
1.22 仲間	1
1.24 成員	1
1.31 言語	8
1.33 生活	2

1.36 待遇	1
1.41 資材	1
1.44 住居	1
1.51 物質	1
1.56 身体	1
2.31 言語	1
3.14 力	1
3.34 行為	1
4.31 判断	1

アラビア語由来のものは次の語である。

musim (季節) (5)、Selasa (火曜日)、Jumat (金曜日)、waktu (時)、Rabu (水曜日)、Sabtu (土曜日)、Kamis (木曜日)、jilid (～冊)、waktu (時間)、derajat (度)、sahabat (友達)、murid (生徒)、huruf (文字) (3)、majalah (雑誌)、kamus (辞書)、kabar (便り)、kalimat (文章)、soal (問題)、istirahat (休み)、kuliah (授業)、kertas (紙)、kursi (いす)、salju (雪)、badan (体)、memjawab (答える)、kuat (強い)、sehat (元気)、mungkin (たぶん)

アラビア語由来の語は「1.16」(時間など)、「1.31」(言語など)に多く見られる。

森村蕃氏は「インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語」(1977)の中で、インドネシアへのアラビア語の流入と深く結びついているイスラム教の伝来について、以下のようにまとめている。

インドネシアにイスラム教、イスラム文化が渡来するに及び、インドネシア語も著しい影響を受けた。

インドネシアにイスラム教が伝来したのは13世紀後半であるといわれ、スマトラ北部に初めて伝えられたという。しかし、それ以前にアラブ人が既に渡来していた記録もあり、もっと以前に伝来していたかもしれない。イスラム教は、15～16世紀にはインドネシア群島各地へ伝わる。インドネシアにイスラム教をもたらしたのは、アラブ人、ペルシア人、インド人であり、またトルコ人などの少数民族もいたという。イスラム教と共に彼等によってイスラム文化がもたらされた。イスラム教の布教は彼等の商業活動と結びつき、イスラム教は、最初、主としてスマトラ、ジャワ、カリマンタンの海岸都市の商人の間に広まったが、やがて商品の流通により内陸の方へと伝えられていった。コーランをはじめ、いろいろな宗教書がもたらされ、政治、経済、学問、文学、芸術などの各種の分野にわたる華やかなイスラム文化がもたらされた。

さらに、イスラム教と共にインドネシアに流入してきたアラビア語によるインドネシア語への影響について、以下のように述べている。

言語の面で受けた影響では、とりわけアラビア文字が伝わり、非常に多くのアラビア語の語彙がインドネシア語にとり入れられていった。アラビア語から直接

とり入れられたほか、ペルシア語、ウルドゥ語などのようなアラビア語の影響を既に受けた言語を経てインドネシア語にとり入れられたものもあろう。インドネシア語にとり入れられたアラビア語起源の語彙は各種の分野のものに及ぶが、とりわけ宗教関係用語がめだつ。回教徒にとってアラビア語は日常の宗教生活に於いて欠くことができない所以である。しかし、日常用語にも可成多くのアラビア語起源の外来語がみられる。

以上のことから、イスラム教と共にインドネシアに取り入れられたアラビア語は、現代でも日常生活と深く結びついており、日常用語にもアラビア語由来の語が多く見られることがわかる。

あらためてアラビア語由来の語を見ると、最も多くの語が見られる「1.16」には「*musim* (季節)、*Selasa* (火曜日)、*Jumat* (金曜日)、*waktu* (時)、*Rabu* (水曜日)、*Sabtu* (土曜日)、*Kamis* (木曜日)」の語が見られる。渥美堅持氏は『イスラーム基礎講座』(2015)の中で、イスラーム暦について以下のようにまとめている。

イスラーム教世界を見ると、忘れてはならないのがイスラーム暦です。イスラーム暦は別名ヒジュラ暦ともよばれ、預言者ムハンマドがメッカからマディーナへその拠点を移動した年、西暦六二二年七月一六日をイスラーム暦元年とする陰暦です。…「サナーティル・ヒジリーヤ」というのがヒジュラ暦のアラビア語の正式な呼称です。…イスラーム暦は大陰暦で動かされている世界なので、年月日ばかりか、時刻も月例で定められます。

イスラーム暦はイスラム教と深く結びついており、イスラム教の伝播とともにインドネシアにも入ってきたと考えられる。その中に曜日の概念も存在していることから、アラビア語の曜日がそのまま新しい概念としてインドネシア語に定着したものと考えられる。

また、「*huruf* (文字)、*majalah* (雑誌)、*kamus* (辞書)、*kabar* (便り)、*kalimat* (文章)、*soal* (問題)、*kuliah* (授業)」のような言語や学問に関する語も多く見られていることから、宗教用語だけでなく日常用語としても使用されていることが分かる。

5. 5 ポルトガル語由来の語

表6 ポルトガル語由来の語 意味分野別分布

分類項目	語数
1.16 時間	5
1.19 量	1
1.26 社会	1
1.31 言語	2
1.35 交わり	1
1.42 衣料	2

1.43 食料	2
1.44 住居	3
1.45 道具	1
1.46 機械	3

ポルトガル語由来のものは、次の語である。

minggu (週間) (5)、Minggu (日曜日)、sekolah (学校)、Inggris (英語)、kartu (カード)、pesta (パーティー)、sepatu (靴)、kemeja (ワイシャツ)、keju (チーズ)、mentega (バター)、meja (机、テーブル) (2)、jendela (窓)、garpu (フォーク)、kereta (電車) (2)、lemari (棚)

ポルトガル語由来の語は「1.16」(時間など)、「1.44」(住居など)、「1.46」(機械など)に比較的多く見られる。

関伊統氏は「インドネシア語の系譜(Ⅱ)」の中で、ポルトガル人によるキリスト教の伝来について以下のようにまとめられている。

ポルトガル人は15世紀末二つの野望を持ってやって来た。一つは西方における対イスラム教の抗争の延長として、ヌサンタラにおけるイスラム社会の紛糾を目標にし、一つには東方の自然の富に目を付け、特にヌサンタラにおける従来からの香辛貿易の利権獲得にあった。……ポルトガルの上記二つの野望は、敢えていえば、キリスト教の人類愛の精神に反するものであったにもかかわらず、その行ないにおいてキリスト教を脅かすイスラムの経済的基盤を奪取するという名目で自からを納得させていた。

さらに、ポルトガル人によるインドネシアにおけるポルトガル語の普及については以下のように述べている。

……ポルトガル人は、強引なまでにポルトガル語の普及に努めることとなり、その初期においては、武力を持ってしても、ポルトガル語の使用を押し進め、やがて、ポルトガルの勢力下におかれた諸港では、商業流通用語はポルトガル語と定め、また、現地女性との婚姻関係をも意図し、同化政策を押し進め、その結果ポルトガル語は、このヌサンタラの地にどっしりと根をおろすかみえた。……しかしながらそのポルトガル語もやがて為政者の交替と共に影が薄れ、マライ語と混有の形からやがてマライ語の一部として、完全にマライ語に吸収されてしまった。

以上のことから、ポルトガル人の二つの野望によって伝来したキリスト教の普及に伴ってポルトガル語が強引に普及され、一時は諸港で商業流通用語として使用されていたが、ポルトガル語として根付くのではなく、マライ語の一部として吸収され現代でも使用されていることがわかる。

ポルトガル語由来の語を見ると、「minggu (週間)、Minggu (日曜日)」という同じ語であるがそれぞれ「週間」と「日曜日」の意味を持つ語が複数見られることや、「kartu

(カード)、pesta (パーティー)、kemeja (ワイシャツ)、keju (チーズ)、mentega (バター)、meja (テーブル)、garpu (フォーク)」のような日本語では外来語とされる語の割合が他の「語種」と比較して多いことが挙げられる。

岸本羊一、北村宗次編の『キリスト教礼拝辞典』(1977)には、キリスト教における教会暦の形成の歴史について以下のようにまとめられている。

教会暦の形成の歴史からみると、ニカイア会議(325年)以前の教会で、最初から確保された礼拝の日は「週の初めの日」であり、それは、ユダヤ教の安息日のあけた日、すなわち日曜日に当たり、イエスの復活を記念する日「主の日」(黙示録1・10, Dominica die, Lord's day など)であった。それは1週間の始まる日であり、また1週の生活を貫いて、新しい「週の初めの日」になる「8日目」として連続していったのである。

また、今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修の『キリスト教礼拝・礼拝学事典』(2006)には、以下のようにまとめられている。

教会暦の基本となる要素は、「週」であろう。創世記での創話神話が物語る神の創造のサイクルが1週間・7日間であることは、単に聖書における特殊な問題ではなく、むしろ、月の運行によって基礎付けられた物理的・生理的变化のリズムを物語るものであろう。聖書はこれをもって神の創造の内実と捉えていると言えよう。ここから、教会共同体も、創造の原理に従って、ユダヤ教の伝統を引き継ぎ、基礎的な時間の変化は、7日間を基礎としていると考えられる。したがって、教会暦の特徴として、年間の記念が週間に凝縮され、すべての救いのみ業の記念が毎週なされていると言える。週間の記念は①復活日の記念である日曜日(主日)、②受難の記念である金曜日において示されるのである。「一週の始めの日」は主の復活の日として4福音書がそれぞれ証言を果たしている日であり、初代教会においてすでに重要な集会の日として守られていたことは広く知られている。ユダヤ教における1週間・7日間という「安息日」(土曜日)を基幹とする伝統は、イエスの受難と復活という重大な物語によって、全く新しい意味が与えられ、「主日」(日曜日)を中心とするキリスト教信仰共同体の生活の基礎となったのである。

以上のことから、「日曜日」や「1週間」、「週」という概念はキリスト教の教会暦から生まれたものであることがわかる。このことから、「minggu (週間)、Minggu (日曜日)」の2語はキリスト教の普及によってともにインドネシアにもたらされ、現代も使用されている語であるといえる。

5.6 ジャワ語由来の語

表7 ジャワ語由来の語 意味分野別分布

分類項目	語数
1.16 時間	1

1.21 家族	1
1.33 生活	2
1.34 行為	2
1.43 食料	1
1.52 天地	1
1.56 身体	1
2.33 生活	1
3.30 心	1
3.50 自然	2

ジャワ語由来のものは、次の語である。

semi (春)、paman (おじさん)、liburan (休み)、libur (休み)、pintar (上手)、tidak pintar (下手)、sapi (牛) (2)、kali (川)、mengenakan (着る)、bosan (つまらない)、enak (おいしい)、sepi (静か)

ジャワ語由来の語は、13語中3語が「用の類」と「相の類」に見られ、その割合は23%と最も高くなっている。

トルセノ氏は「インドネシア語発展に寄与したジャワ語の社会的背景の一考察」の中で、ジャワ語についてまとめている。

……200種余りのインドネシア地方語の中で、最も有力な存在を有するものにジャワ語がある。その理由は、インドネシア総人口の約半数が、ジャワ語人口であると先きに述べた。しかし、ジャワ語と一口にいうが、ジャワ島全体がこのジャワ語人口に当たるかというとはそうではなく、ジャワ語発生の地は、ジャワ東部および中部がその範囲に該当するのである。

関伊統氏は「インドネシア語の系譜(Ⅱ)」の中で、ジャワ語の発展について以下のようにまとめている。

……ジャワには、シンハサリ、マジヤパヒットと高度な文明の王朝が興った。それと共にジャワ語(古代ジャワ語=カウイ語)の発展を見るわけである。

……西暦929～1222年にかけて、ジャワは文化史の面からみると、注目に値する時代であった。この頃はジャワ史の価値体系は、西部ジャワから東部ジャワのブランタス河畔に移行した。従ってヒンズーの影響は弱まり、ジャワ独自の伝統的価値体系の確立が見られ、当時の文化は、最早、インドの原文化は影を潜め、ヌサンタラ独自の色彩を持った、インド文化をよく吸収しきった即ちヌサンタラ化した文化といえた。これをいわゆるジャワニズム文化と称している。

……この様に大きなジャワニズムの世界では、当然ジャワ語の使用の拡散が考えられる。マラッカ海峡に根をおろしているマライ語も当然影響を受けることになる。そこで、この観点より考察してみると、ジャワ語はその当時、支配者の言語であり、高度な学術・文化を持っていたから、その拡散は容易であったろうと推測されるが、意外にも、実際には、ジャワ島以外即ち海外との交流用語として

存在していたマライ語の位置に取って替わることはなかったのである。……ジャワ語自身の性格にもよるわけで、即ちジャワ語は階級差別を有する言語として存在しており、従って一般に外部の者には習得しがたい言語であるということ、従って交流用語としてはマライ語の存続が尚、見られたわけである。……マライ語はジャワ語をも吸収して増々その語彙を豊かにしていったといえよう。

以上のことから、ジャワ語は交流用語として発展していたマライ語の立ち位置に替わることはないまでも、インドネシア地方語の中では歴史も古く、最も話者が多いことから、現代においても大きな位置を占めていることが分かる。

ジャワ語由来の語をみると、「*mengenakan* (着る)、*bosan* (つまらない)、*enak* (おいしい)、*sepi* (静か)」のような「用の類」と「相の類」の割合が高く、これはジャワ語が古くから使用されてきた土着の言葉であることを表している。関氏も述べているように、土着のジャワ語を吸収して出来たマレー語にジャワ語由来の「用の類」、「相の類」に分類される語の割合が多く見られるのは当然であるともいえるだろう。

6. 日本語の語種に見られる特徴

次に、日本語の語種とインドネシア語の「語種」を比較する。日本語の語種に見られるそれぞれの特徴についてまとめる。『新版日本語教育事典』(2005)では相澤正夫氏が「和語」について以下のようにまとめている。

語義の面では、和語の単純語が、あらゆる概念の枠組みをつくり上げるうえで、最も基本的な骨格部分を形成している点が注目される。言語習得の際に、子どもが最初に習得するのは和語であり、それを基準にして上位概念や下位概念をふくらませていく。また、語彙の意味分野のうちでは、自然物や自然現象を指す語に和語の多いことが知られている。対象自体に古代から大きな変化がなく、漢語や外来語を取り入れる必要があまりなかった分野と考えられる。

和語の文体的特徴は、ひとことでいえば日常語的ということである。くだけた親しみやすい感じを出すことができる反面、古くさくて俗っぽい感じを伴い、幼稚な印象を与えることもある。……

「漢語」について以下のようにまとめている。

語義の面では、和語に欠けている抽象概念を表す語彙を、漢語が組織的に補充している点が注目される。とくに学術用語、法律用語など近現代社会にとって不可欠な語彙は、漢語の抽象語を抜きにしては考えにくい。また、和語の「くさはら、まきば」と漢語の「草原、牧場」のような具体的な意味をもつ類義語においても、和語と漢語の指示物には規模に明らかな違いがあり、漢語の導入が意味の細分化に役立っている。

漢語の文体的特徴は、ひとことでいえば文章語的ということである。日本語の文章は漢文の影響を受け、漢語を多用する傾向があった。「きのう、きょう」より

も「昨日、本日」のほうが改まった言い方であり、格調の高さを感じさせるのも、これらの漢語がもともと文章語であったことに由来する。

「外来語」について以下のようにまとめている。

外来語は原語の語形・意味を変容させ、日本語化して受け入れている。……
意味の面では、原語よりも狭く限定されたり、特殊化されたりするのが普通である。たとえば、「オープン(する)」は「開店、開業」の意味に限定され、「マンション」は「西洋風集合住宅」の意味に特殊化されている。「バーチャル」のように原語の意味から大きくずれて「仮想」という意味で定着したのものもある。
外来語の文体的特徴は、ひとことでいえば新語的ということであり、とくに和語、漢語との対比において、新しくとやられているという雰囲気やイメージをもちやすい。……また、本来は特殊な領域の専門語として使われていた外来語が、一般社会に流出している場合も多い。

以上のことから、和語は、日常的に使用される平易な語であり、自然物や自然現象を指す語にも使用されている。漢語は、文章的で格調の高さを感じさせ、和語に欠けている学術用語や法律用語などの抽象概念を表す語彙の補充や意味の細分化に役立っている。外来語は、新語的で和語や漢語と比べると新しくとやられているというイメージをもちやすく、意味は原語よりも狭く限定されたり、特殊化されたりして使用されている。

ここから、「日本語では和語、インドネシアでは無印のもので対応するもの」、「日本語では和語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」、「日本語では漢語、インドネシア語では無印のもので対応するもの」、「日本語では漢語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」、「日本語では外来語、インドネシア語では無印のもので対応するもの」、「日本語では外来語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」、「日本語で和語と漢語の混種語、インドネシア語では他の語源で対応するもの」の語彙を見ていく。

7. 日本語の語種とインドネシア語の「語種」の比較

「日本語では和語、インドネシアでは無印のもので対応するもの」は次の語である。

朝/pagi、明日/besok、昨日/kemarin、昼/siang、夜/malam、上/atas、うしろ/belakang、下/bawah、そと/luar、そば/dekat、samping、縦/panjang、西/barat、東/timur、左/kiri、前/depan、右/kanan、南/selatan、横/lebar、あなた/Anda、男/laki-laki、女/perempuan、誰/siapa、人(ひと)/orang、兄/kakak、kakak laki-laki、姉/kakak、kakak perempuan、子/anak、父/ayah、母/ibu、友/teman、歌/lagu、nyanyian、かね/uang、傘/payung、薬/obat、果物/buah、buah-buahan、酒/minuman keras、塩/garam、鶏(にはとり)/daging ayam、家/rumah、戸/pintu、庭/kebun、道/jalan、青/biru、赤/

merah、黄/kuning、黒/hitam、緑/hijau、雨/hujan、風/angin、川/sungai、魚(うを) /ikan、足/kaki、體/tubuh、口/mulut、卵/telur、手/tangan、齒/gigi、鼻/hidung、腹/perut、耳/telinga、目/mata、なる/menjadi、うたふ/menyanyi (歌う)、書く/menulis、着る/berpakaian、memakai、穿く/memakai (はく)、遇ふ/berjumpa、bertemu (会う)、売る/menjual、買ふ/berbelanja、membeli (買う)、よい/bagus、わるい/buruk (悪い (結果、様子))、弱い/lemah、新しい/baru、おそい/lambat、ながら/sambal、古い/lama、tua、若い/muda、暑い/panas、厚い/tebal、多い/banyak、おほきい/besar、重い/berat、軽い/ringan、寒い/dingin、冷しい/sejuk、狭い/sempit、高い/mahal、ちひさい/kecil、近い/dekat、遠い/jauh、長い/panjang、低い/rendah、廣い/luas、短い/pendek、痛い/sakit、たい/ingin、やすい/murah、甘い/manis、暗い/gelap、静(しづか) /tenang、いいえ/tidak

以上の109語が見られる。内訳は、「体の類」が65語、「用の類」が11語、「相の類」が32語、「その他」が1語である。「体の類」では、「上/atas、うしろ/belakang、下/bawah、そと/luar、そば/dekat、samping、縦/panjang、西/barat、東/timur、左/kiri、前/depan、右/kanan、南/selatan、横/lebar」のような場所に関する語や「あなた/Anda、男/laki-laki、女/perempuan、誰/siapa、人(ひと)/orang、兄/kakak、kakak laki-laki、姉/kakak、kakak perempuan、子/anak、父/ayah、母/ibu、友/teman」のような人に関する語、「薬/obat、果物/buah、buah-buahan、酒/minuman keras、塩/garam、鶏(にはとり) /daging ayam」のような食に関する語、「青/biru、赤/merah、黄/kuning、黒/hitam、緑/hijau」のような色に関する語、「足/kaki、體/tubuh、口/mulut、卵/telur、手/tangan、齒/gigi、鼻/hidung、腹/perut、耳/telinga、目/mata」のような体に関する語が多く見られる。また、他に比べて「用の類」と「相の類」に分類される語も多い。

以上のことから、日本語の和語の平易なイメージと同様、インドネシア語の無印の語も平易なイメージを持つ語が多いと言える。また、「用の類」と「相の類」に分類される語が多いことから、古くから使用されている土着の言葉が多いことも考えられる。

「日本語では和語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」は、次の語である。

秋/musim (A) gugur、いつ/kapan (J/Jv)、時/ketika (Skr) , waktu (A)、夏/musim (A) panas、春/musim (A) semi (Jv)、冬/musim (A) dingin、北/utara (Skr)、男/pria (Skr)、女/wanita (Skr)、人(ひと) /manusia (Skr)、私/saya (Skr)、をぢ/paman (Jv)、をば/bibi (Pers?)、友/sahabat (A)、國/negara (Skr)、negeri (Skr)、聲/suara (Skr)、言葉/kata (Skr)、話(はなし) /cerita (Skr)、休み/cuti (Hind)、istirahat (A)、libur (Jv)、切手/perangko (D)、紙/kertas (A)、靴/sepatu (Port)、机/meja (Port)、窓/jendela (Port)、鍵/kenci (Skr)、皿/piring (Pers)、箸/sumpit (C)、眼鏡/kacamata (Skr)、色/warna (Skr)、雪/salju (A)、川/kali (Jv)、頭(かしら) /kepala (Skr)、顔/muka (Skr)、體/badan (A)、いふ/berkata (Skr) , mengatakan (Skr) (言う)、着る/mengenakan (Jv)、わるい/jelek

(J?) (悪い (結果、様子))、強い/kuat (A)、静 (しづか) /sepi (Jv)、どうぞ/silakan (Skr)

以上の45語見られる。内訳は、「体の類」が38語、「用の類」が3語、「相の類」が3語、「その他」が1語である。インドネシア語の「語種」は、サンスクリット語が19語、アラビア語が11語、ジャワ語が6語、ポルトガル語が3語、ペルシャ語が2語、ジャカルタ語又はジャワ語が1語、ヒンディー語が1語、オランダ語が1語、中国語が1語、ジャカルタ語が1語であり、サンスクリット語が最も多く、次いでアラビア語、ジャワ語の順になっている。

以上のことから、日本語の和語に平易なイメージがあることから、インドネシア語の「語種」の中でも多く見られるサンスクリット語やアラビア語、ジャワ語などの語は比較的平易な印象を持つ語なのではないかと考えられる。

「日本語では漢語、インドネシア語では無印のもので対応するもの」は、次の語である。

便利/kemudahan、時/pukul (時)、自身/diri, diri sendiri (自分)、家庭/rumah tangga、会社/perusahaan、図書館/perpustakaan、勉強/belajar, pelajaran、絵/gambar, lukisan、服/pakaian、煙草/rokok、野菜/sayur、料理/masakan、門/pintu、病気/penyakit

以上の17語見られる。これらは全て「体の類」に分類される語である。日本語における漢語の特徴は、文章語的で抽象概念を表す語彙を補充していることが挙げられる。これらの語彙にも日本語における漢語の特徴が見られる可能性がある。

「日本語では漢語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」は、次の語である。

時/jam (Pers)、度/derajat (A)、会社/kantor (D)、学校/sekolah (Port)、銀行/bank (D)、意味/arti (Skr)、語/kata (Skr)、辞書/kamus (A)、新聞/koran (D)、surat kabar (A)、電話/telepon (D)、本/buku (D)、映画/film (D)、音楽/musik (D)、写真/foto (D)、服/baju (Pers)、帽子/topi (Hind)、菓子/kue (C)、砂糖/gula (Skr)、茶/teh (C)、便所/kamar (D) kecil、かばん/tas (D)、時計/jam (Pers)、天気/cuaca (Skr)、葡萄/anggur (Pers)

以上の25語見られる。これらは全て「体の類」に分類される語である。「日本語では漢語、インドネシア語では無印のもので対応するもの」よりも多くの語が見られている。中でも、「意味/arti (Skr)、語/kata (Skr)、辞書/kamus (A)、新聞/koran (D)、surat kabar (A)、電話/telepon (D)、本/buku (D)」のような言語に関する語が比較的多く見られる。インドネシア語の「語種」は、オランダ語が10語、サンスクリット語が4語、ペルシャ語が3語、アラビア語が3語、中国語が2語、ポルトガル語が1語、ヒンディー語が1語であり、オランダ語が最も多く見られ、サンスクリット語、ペルシャ語、アラビア語と続く。

先にも述べたように、日本語における漢語の特徴は文章語的で抽象概念を表す語彙を補充していることが挙げられる。以上のことから、インドネシア語ではオランダ語が比較的多く見られることから、オランダ語はインドネシア語において、日本語に

おける漢語的な役割を果たしているのではないかと考えられる。

「日本語では外来語、インドネシア語では無印のもので対応するもの」は、次の語である。

ナイフ/pisau

以上の1語のみである。

「日本語では外来語、インドネシア語では他の語源のもので対応するもの」は、次の語である。

ホテル/hotel (D)、シャツ/kaus (Pers D?)、ポケット/saku (D)、コーヒー/kopi (A/D)、バタ/mentega (Port) (バター)、パン/roti (Hind)、ペンシル/pensil (E)、ペン/pulpen (D)、ラヂオ/radio (D)

以上の9語見られる。これらは全て「体の類」に分類される語である。「コーヒー/kopi (A/D)、バタ/mentega (Port) (バター)、パン/roti (Hind)」のような食に関する語や、「シャツ/kaus (Pers D?)、ポケット/saku (D)」のような衣服に関する語、「ペンシル/pensil (E)、ペン/pulpen (D)」のような日用品に関する語が比較的多く見られる。また、インドネシア語の「語種」は、オランダ語が4語、ペルシャ語又はオランダ語が1語、アラビア語又はオランダ語が1語、ポルトガル語が1語、ヒンディー語が1語、英語が1語であり、オランダ語由来の語が比較的多く見られる。日本語における外来語の特徴は、新語的でしゃれているイメージがあり、意味は原語よりも狭く限定されたり、特殊化されたりして使用されていることが挙げられる。これらの語はオランダ語由来のものが多いことから、インドネシアにとっては新しい概念であると考えられる。以上のことから、日本語で外来語とされている語はインドネシア語においても似たような特徴を持つのではないかと考えられる。

「日本語で和語と漢語の混種語、インドネシア語では他の語源で対応するもの」は、次の語である。

切符/karcis (D)、tiket (E)

以上の2語で、どちらも「体の類」に分類される語である。「切符」は「切(きつ)」が和語で、「符(ふ)」が漢語の混種語である。インドネシア語の「語種」は、オランダ語と英語の語が見られる。

8. まとめ

以上のことから、インドネシア語と日本語の対照研究において、あまり研究が進んでいない語彙の分野に着目して、語種についての調査を行った。日本語や日本語との対照研究で活用される語種という概念をインドネシア語に当てはめることで、インドネシア語においても「語種」による特徴の違いや文体の違いに迫れる可能性があることがわかった。今後は、漫画や新聞、雑誌なども用いて、使用される媒体によって見られる「語種」の特徴から、文体の特徴についても考察したい。

【参考文献・調査資料】

土居光知 (1933) 『基礎日本語』 (六星館)

関伊統 (1970) 「インドネシア語の系譜」 (『拓殖大学論集』 (72)、41-72、拓殖大学研究所)

- 関伊統 (1970) 「インドネシア語の系譜 (II)」 (『拓殖大学論集』 (74)、129-159、拓殖大学研究所)
- トルセノ A.S (1976) 「インドネシア語発展に寄与したジャワ語の社会的背景の一考察」 (『拓殖大学論集』 (108)、203-237、拓殖大学研究所)
- 岸本羊一、北村宗次編 (1977) 『キリスト教礼拝辞典』 (日本基督団出版局)
- 森村蕃 (1977) 「インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語」 (大阪外国語大学学報 (39)、253-265、大阪外国語大学)
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語—意味と使い方』 (角川書店)
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』 (大日本図書)
- 今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修 (2006) 『キリスト教礼拝・礼拝学事典』 (日本キリスト教団出版局)
- 柏野和佳子 (2006) 『研究所報告 『分類語彙表』 の特徴と位置付け』 (『日本語科学』 19, 143-160、国書刊行会)
- 響場淳子 (2008) 『意味分野の観点から見た土居光知「基礎日本語」』 (『早稲田日本語研究』 (17)、1-12、早稲田大学日本語学会)
- Alan M. Stevens, A. Schmidgall-Tellings 編 (2010) 『A comprehensive Indonesian-English dictionary: Second Edition』 (Ohio University Press)
- 山田俊雄、築島裕、白藤禮幸、奥田勲編 (2010) 『新潮現代国語辞典 第二版』 (新潮社)
- 佐藤武義、前田富祺編 (2014) 『日本語大事典』 (朝倉書院)
- 渥美堅持 (2015) 『イスラーム基礎講座』 (東京堂出版)
- 東京外国語大学言語モジュール インドネシア語
(http://coelang.tufs.ac.jp/mt/id/vmod/v_bunrui.php) (2020/01/06 確認)
- 東京外国語大学言語モジュール 日本語
(http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ja/vmod/v_bunrui.php) (2020/01/06 確認)